優しき乙女たち

この年になって看護婦学校（三重町）の教壇に十数時間立つことになった。卒業して間もない私の人生第一歩も女子師範学校の教壇だった。人生の始めと終わりに同じ年ごろの乙女たち。時代差は五十年。所も雪国と南国。この生徒たちの思いを知りたく短いアンケート調査をした。無記名自由提出にしたが五十一人全員が答えてくれた。さすが看護学を志す娘たちである。

第一問「かりにあなたが老後寝ついたら次のいずれを選ぶか？」「自宅」は六五％、特養老人ホームは一八％、病院は八％、老人保健施設は六％（すべて四捨五入）「その他」のうち一人は「家族がするように」と。現在一般社会人女性への諸調査では、「自宅」は二割「施設や病院」は三割、あとは無回答となっている。

第二問「夫の親を親と思うか？」。四十七人九二％が「親と思う」。思わないは四人。これは決してショッキングな質問ではない。都市部女性意識調査では重要項目である。某教授の調査では五割強が親ではないとなっている。回答保留の娘は「暮らしてみな

ければ」と率直。続いて第三問「結婚したら夫の親と同居か別居か？」別居五一％、同居は三三％、「自分の親となら同居」は一四％。

老親の関心深い問「別居していても老衰、病気すれば同居介護するか？」「する」が四十八人九四％、「しない」が二人。しかし、この優しさも人生苦をくぐりゆく中で変動していくであろう。

最後に、「結婚と職業いずれを重視するか？」。看護職志望だからまず職業自立と予想したが、断然「結婚」で四十人七八％。職業重視は十人どまり。青春とは愛にあこがれ結婚を夢みることで時代差はない。ほぼ同じ質問を任運社の看護婦と寮母にしているが、次回はそれとの対比を。

（一九九三年七月二日）